

こどもたち TEKNA

2015年復活日号

『あのかたは、復活なされた！』

—主イエスは、いつも私たちと共に—

司祭 ペテロ 吉村 庄司

私の心には、4年前の東日本大震災、20年前の阪神・淡路大震災に象徴する大震災が、甦ってきます。そして、この世界で人間の価値と尊厳を、無視する殺人、テロ行為が起こっています。私たちが心して考え、どのように対応していくべきか、自問自答しています。

それでも、Happy Easter!と歓びの声を、交換したい気持ちで一杯です。

復活日の福音書に登場するのは、女性たちです。主イエスの男の弟子たちは逃げ去ってしまったのに、女性たちは勇気をもって十字架のもとにまでついていきましたし、主イエスの遺体を手厚く葬ろうとしたと言われます。

週の初めの日とは日曜日ですが、ユダヤでは仕事始めの日で、女性たちは改めてイエスの遺体に油を塗りに行った、という話です(参照:マルコ16・1-4)。当時のユダヤの墓は、岩をくりぬいて造られていて、入り口は女性たちだけでは動かさないような、大きな石で封じられていました。見ると、その石が転がしてあります。主イエスの遺体がなくなっていた、という話です。

「墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っている…婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あのかたは復活なされて、ここにはおられない。…」(同16・5-7)。

墓の中にはイエスの遺体はなく、天使が現れて、イエスの復活を告げます。だれもイエスの復活のできごと自体を目撃したわけではありません。ただ空の墓が、主イエスの復活のしるしとして残されています。

それでは、「復活」とはいったい何でしょうか。主イエスの遺体が生氣を取り戻し、起き上がって墓から出ていった、ということなのでしょう。この物語が告げようとしているのは、そのようなイエスの蘇生のことなのでしょう。

実は、ここでカギとなるのは、その当時のユダヤ人たちの信仰です。ユダヤ

人たちは、終末の時には神が世界を新しくし、すべての死者を復活させる、と信じていました。人が死ぬと「死者の国」（「陰府」とも呼ばれる）に下り、そこで待たされます。そこは冷たく、暗く、時間も止まった状態として想像されていました。その死者たちが、終末の時、神の新しい創造のわざによって新しい存在へと呼び出されます。これは、当時のユダヤ教に流布していた黙示文学などの思想です。

主イエスの弟子たちは、このユダヤの伝統にのっとなって、自分たちが体験した全くユニークなできごとを理解しました。すなわち、終末における新しい天地創造が、今ここで、主イエスにおいて先取りされた、と理解したのです。だから、主イエスの復活とは、生まれ、衰え、死んで朽ちていく生命の過程が逆行する、というような「蘇生」を意味しているわけではありません。歴史のただ中に終末のできごとが先取りされ、時間の中に永遠が割りこんできた、ということです。

このことをパウロは「初穂」という言葉で表現しています（I コリント 15・20）。つまりユダヤ教では収穫の初物を神にささげることによって、それに続く収穫全体が神に祝福されると考えました。そこで、主イエスの復活はすべての人の復活の初穂としての出来事だ、と言っています。主イエスはすべての人に先立って復活させられ、後に続く人びとの復活の保証とされた、ということです。だから空の墓は、この新しい天地創造のしるしです。

復活された主イエスは、あらゆるところに現れて、弟子たちの心に話しかけ、目を開かせておられます。

マタイ 28・16 以下に、『さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。…イエスは近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる』』

主イエス・キリストは、いつもあなたがたと共に、わたしと共に、居てくださるのです。何という有難い主イエス・キリストの遺言ではないでしょうか。

私たちは、生きているのです。孤独ではないのです。主イエス・キリストがいつも共に私たちと共にいてくださるのです。信仰と希望と愛に満ちた人生を歩むことが出来るのです。

終わりに当たって、信仰の友人からもらったメッセージをお送りします。

ある裕福な男とその息子は珍しい芸術作品を集めていた。彼らのコレクションにはピカソからラファエロまで含まれていた。

ベトナム戦争が勃発し、息子は戦場にかり出された。彼は非常に勇敢で、傷ついた兵士の救助中に亡くなってしまった。息子の死を知らされた父親は悲しみに打ちひしがれた。

1ヶ月後、もうすぐクリスマスがやってくるという時に彼の家のドアをノックする音が聞こえた。ドアを開けてみると、一人の若い男が大きな包みを手に持って立っていた。若い男は言った。「あなたは私のことをご存じないでしょうが、私はあなたの息子さんに命を救ってもらった兵士です。」

その日、彼はたくさんの命を救いましたが、私を安全な場所に運んでいる最中に銃弾が彼の心臓を貫きました。即死でした。彼はよくあなたのことを話していました。また、あなたが芸術を愛されていることも。」

若い男は包みを差し出すとこう言った。「たいした物ではないのですが... 私は芸術家としてはたいしたことはありませんが、きっと息子さんなら、これをあなたに持って欲しいと言うだろうと思って持ってきました。」

父親は包みを開けてみた。それはその若い男が描いた息子の肖像画だった。父親は息子の特徴が見事に捉えられているその絵を食い入るように見つめた。見ているうちにみるみる彼の目は涙でいっぱいになった。彼は若い男に礼を言うと、この絵を買わせてくれと頼んだ。

「とんでもないです。あなたの息子さんが私のためにしてくれたことに報いるなんてことは到底出来ませんが、これは私からのささやかなプレゼントです。」

父親はその肖像画をマントルピースの上に飾った。それからというもの訪問客があると必ず、彼は所有している他の作品を見せる前に、その息子の肖像画を見せた。

数ヶ月後、その父親も亡くなった。彼の所有していた絵画がオークションにかけられることになった。彼の素晴らしい絵画コレクションを見るために、また、自分たちのコレクションに加えるために一つ購入しようと興奮した面もちで、多数の有力者達が集まってきた。

舞台には、あの息子の肖像画が立てられていた。競売人がオークションの開始を宣言するために槌を叩いた。



「この息子の肖像画から始めます。さあ、どなたが買われます？」しばらく沈黙があった。そして、部屋の後ろの方から声があがった。「私たちは有名な絵が見たいんだ！！この絵は飛ばそう。」しかし競売人は譲らない。「さあ、どなたが買われます？誰から値を付けます？\$100から？ \$200から？」

別の人が怒ったように叫ぶ。「俺たちはこの絵を見るためにやって来たわけじゃない！ ゴッホやレンブラントを見るためにやって来たんだ。さあ、本物のオークションを始めようじゃないか！」しかし、競売人はさらに続ける。「息子です！息子です！さあ、誰がこの息子を引き取りますか？」

とうとう部屋の一番後ろの方から声があがった。声の主は長い間、あの父親と息子の家の庭師をやっていた男だった。「\$ 10で買います。」貧しい男だったので、それが彼に出せる全てだった。「\$ 10が出ました。\$ 20で買われる方はいらっしゃいませんか？」

集まっている人たちはだんだん怒りだした。彼らは「息子の絵」なんかには全然興味がなかった。彼らのコレクションに加える価値あるものを欲していた。

競売人は槌^{つち}を叩いた。「他に買われる方はいませんか？では、\$ 10で！！」

2列目に座っていた男が叫んだ。「さあ、本当のコレクションをはじめようじゃないか！」

競売人は槌を静かに置くと、こう言った。「すみません。競売は終了です。」

「何だって？あの有名な絵画はどうなったんだ？」

「すみません。この競売を指揮してくれと頼まれたとき、彼の遺言の中に秘密の条件があることを聞かされたのです。私も今の今までその秘密の条件のことを知らされていませんでした。その条件とは、オークションに掛けられるのは息子の肖像画のみで、その絵を買い落とした人に絵画を含めた全財産を相続するというものでした。そうなんです。息子を引き取った人が全てを得るのです！！」

神さまは2000年前に自分自身の息子を賜れました。彼は残酷な十字架刑により死んでしまいました。神さまからのメッセージは今日でも「息子です！息子です！さあ、誰がこの息子を引き取りますか？」というものです。息子を引き取った人は誰でも全てを得るのです。

ヨハネによる福音書3章16節「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

